

社会福祉法人稚内市社会福祉事業団
平成31年度事業報告

法人経営理念を具現・継続する年度指針として、『凡事徹底』をスローガンとして掲げ、職員一人ひとりがプロ意識を持ち大切なことを見失わない努力、そして当たり前のことを持続させるチーム力を高める努力を実践してまいりました。

私たちは、自らが地域の社会資源であることを自負し、地域住民の複雑多様化する福祉・介護ニーズに応えるため、支援者としての知識・技術の向上を目的とした研修計画や、社会貢献活動計画に沿って各種予定事業を計画的に実践し、その活動を通して応援や感謝、そして要望など多くのメッセージをいただき、次年度への課題として事業計画の中に継承しました。

また、民間企業としての社会的責任の一つである職員の雇用改善では、人材確保効果の期待と働き方改革法の適用時期を見据えまして、非正規職員の正職員化など慎重且つ大胆な機構改革を遂行することが出来ました。年度の主要事業の一つでもあったコーポレートマーク（法人ロゴマーク）の作成は、前年度からの勘案事項であり法人作成委員会において度重なる協議、検討を通してコンセプトをまとめ上げ、デザイン制作事務所に依頼し完成することが出来ましたので、法人がより一層地域に浸透した存在となり、人材確保などの諸活動においても親近感と法人のブランドを高める広告マークとして、大切に使用していきたいと思っております。そして、12月から約二月間、従来型特別養護老人ホーム富士見園において職員、利用者のインフルエンザ感染があり、ご家族や関係機関には多くのご心配とご迷惑をお掛けしましたが、幸いにも重症化した方も無く経過回復し、ホッとした矢先の新型コロナウイルスの感染拡散の騒ぎでは、施設への面会規制やお断り、全職員への勤務内、私生活での行動自粛など法人一枚岩となって感染予防に取り組みました。

平成31年度も、様々な事案と向き合い事業運営に邁進してまいりましたが、地域の貴重な社会資源として施設規模を維持し、事業継続するに最も必要である人材確保については、ハローワークをはじめ関係機関、職員の紹介等を受けて、16人を雇用することができましたことに感謝いたします。

特別養護老人ホーム事業、従来型富士見園におきましては、重介護者の受入れと介護者による虐待や不適切介護など、日常生活におけるセーフティーネットとしての機能を担う施設ですので、専門性を高め根拠あるケアサービスを提供する体制づくりのため、介護福祉士の受験に向けた勉強会を開催し、見事3名の介護員が合格しました。また、法人が整備する設備・施設等整備計画に沿って、園内照明のLED化、2基ある給湯ボイラー1基の更新、そして事故や自然災害が起因した停電時に入所者や職員の安全が損なわれないように、大型の発電設備を新規に備え災害時でも安心した生活のできる安全な施設機能を強めました。

長期入所では、年間平均要介護度が4.1と他の施設と比べても高い状況にありますが、多職種連携にて早期対応に努め入院率、退所率を昨年より大きく減じることができました。その結果、利用率は目標値を上回る結果となりました。短期入所においても目標値を上回る結果となり、入所希望申し込みは年間で50名増となりました。

ユニット型富士見園におきましては、従来と異なり小規模で居住空間をはじめ個を重んじた施設として、終末期にある入居者・家族への緩和ケアや、入居者による介護職員へのハラスメント対応、感情労働と言われる職員のストレス対応などきめ細やかな支援に努めました。また、1名の介護員が見事介護福祉士に合格し、利用率では目標値を大きく上回る結果となりました。

養護老人ホーム富士見園におきましては、高齢者の自立生活支援を事業目的とした施設ですので、生きがいと潤いなど活気ある生活実現への取り組みとして温室での野菜栽培や各種クラブ活動の実施、また、併設デイサービスセンター利用者との交流レクリエーションの開催など、介護予防に趣きを置いた支援に努めました。

また、2基ある給湯ボイラー1基の更新と居室床材の更新など、施設機能と住環境整備を整備計画に沿って実施しました。施設利用状況では、介護施設とは異なり措置施設の当園は入所決定を措置者である稚内市が行いますが、年間で長期入院などを理由に11名の退所がありましたが、稚内市担当課との連携により利用率は目標値を若干下回ったものの、空床を長引かせることなく全国の平均値を大きく上回りました。

デイサービス事業におきましては、市内で新規事業所が開設されたことや、老人ホームや居宅系施設への入所依存度の高まり、そして年末から市内で感染拡大があったインフルエンザへの予防、さらに年度末に全国・全世界的に拡散した新型コロナウイルス感染への予防意識の高まりもあり、富士見園、潮見園の両センター共利

用率は昨年を下回る結果となりました。今まで、特殊浴槽を有する施設として重介護型をセールスポイントとしてきましたが、事業全体の利用平均介護度の実態は1.8と低く、利用目的は他者との交流や機能訓練、催事、食事、入浴、職員とのふれあいなど様々でありますので、他事業所の利用状況や利用者・家族アンケートの結果を基に、利用対象者の絞込みやサービスの差別化など、両センターの今後の事業経営の在り方について考察してまいります。

就労継続支援B型事業所稚内市北光園におきましては、水耕栽培事業の地域浸透や市内の同類事業所の中では工賃が良いこともあり、冬期間の短期季節利用や新たに2人の通年利用者を迎えることができ、昨年に引き続き利用率が向上しました。利用登録数46名、1日利用平均38名の方々がクリーニングと水耕栽培の作業に意欲的に従事しています。

クリーニング事業は、年末の繁忙期に作業の源でもある蒸気を生成するボイラーが故障し、急遽更新しなければならないアクシデントもありましたが、クリーニング商品単価の増額改正と営業に努めた結果、新たな取引先や受託量が増え前年より収入を伸ばすことが出来ました。

水耕栽培事業では、整備計画に沿って工場の拡張と栽培装置を増設し、増産体制を図ることができましたので、前年度から販売に向けて営業準備しておりました離島、南宗谷、上川北部に販路を広げ販売計画の実現と、特許庁に申請していたロゴマークの商標権も取得することが叶いました。しかしながら、12月から3月までの間、一株あたりの個体生育率が低迷（小株化）し、収入は前年度の2倍程に増額したものの、当初の見込みを下回り今後課題を残す結果となりました。

共同生活援助事業所スマイルらいふグループホームにおきましては、整備計画に沿って女性棟の外壁等改修工事と、長期間使用した家電製品や家具等の生活調度品の買い替えをしました。

そして、グループホーム開設8年を迎えて、入居者間の親睦をより一層深める目的で札幌への一泊旅行を実施し、観劇を楽しみ夜の歓楽街では美味しい一時を過ごしました。移動手段は疲労軽減のため飛行機を利用しましたが、これもまた新千歳空港という非日常的空間に滞在し有意義な旅となりました。

入居状況では、男性1名の退去後新たに入居者を迎えることが出来ましたが、長期間空室（1室）の女性棟には新たな入居者がなく、男性入居者で長期入院する方もおりまして、入居率は昨年を若干下回る結果となりました。しかしながら、年度末に北光園に自宅から通う女性利用者から入居希望があり、早速体験入居を受け入

れ、4月からの定員充足に向けて支援することが出来ました。

居宅介護支援センター潮見園、東地区在宅介護支援センターにおきましては、介護、福祉にとどまらず、対象者を取り巻く様々な日常生活上の課題、事案に係ることもありますので、ケアマネジャーは自己研鑽を高めて対応知識を養うことを目的に、市内で開催される各種研修やセミナーに積極的に参加しました。

また、稚内市包括支援センターをはじめ各関係機関との連携に心掛け、地域の皆様の生活の質が維持・向上できますように親身な対応に努めました。